

東京バッハ合唱団 月報

[第 555 号] 2008 年 9 月 第二版

〒156-0055 東京都世田谷区船橋 5-17-21-101 Tel : 03-3290-5731 Fax : 03-3290-5732
E-mail : bachchortokyo@aol.com http : //www2.tky3web.ne.jp/~bach/chor/

BACH-CHOR, TOKYO

Monthly Newsletter No.555
September 2008

5-17-21-101 Funabashi,
Setagaya-ku, Tokyo

合唱団の揺籃の地、アルザスとシュヴァルツヴァルトを巡る

「第 5 回ヨーロッパ演奏旅行」下見の旅を終えて

大村 恵美子

来夏の演奏旅行の下見をかねて、8月21日から9月1日まで、各地の関係者の方々を訪ねてきました。コンサートの会場や曲目もほぼ大枠が決まりました。(表参照)

今度のツアーの舞台となる地域は、ライン川にそった独仏国境の一带で、フランス側はストラスブールを中心としたアルザス地方、ドイツ側にはフライブルクをかかえこんだ深い森林地帯のシュヴァルツヴァルト(黒い森)が広がっています。森の北のすそに位置するシュトゥットガルトをふくめて、この合唱団の夢が芽生え、時に応じて、その後の歩みをも大きくはぐくみ育ててくれた、ここはまさに揺籃の地なのです。

/// シトゥットガルトで2回のコンサート ///

第5回ヨーロッパ演奏旅行の直接のきっかけは、南吉衛牧師のシュトゥットガルト教会就任でした。南先生は、1995~1997年にケルンで教会を牧されたあと、東京の信濃町教会に数年、そして2007年から3年間の予定で、シュトゥットガルトに事務所をおくヴュルテンベルク州教会の招聘でふたたびドイツに赴かれ、パウロ教会でも働かれることになりました。

ケルンするとき(第4回演奏旅行、1997年)も、ベルリン-アイゼナハの間に、ケルンで2回のコンサートを準備してください、ついでシュトゥットガルトが任地と決まるやただちに、この地のパウロ教会(400人収容)(写真p.4)が私たちを招待して下さるよう働きかけてくださったのです。さらにもう一回、隠退された奉仕女(Diakonisse)たちのついの住処であるムッターハウス(Mutterhaus 母の

家)でも、3泊の静寂な宿泊を私たちに提供されるとともに、ここの礼拝堂(150人収容)でのコンサートも開けるようにしていただきました。現代的でにぎやかな州都のなかでも、このおかげで、落ち着いた環境で3日間をすごせることになりました。

シュトゥットガルトといえば、1980年代には、毎夏、市

第5回ヨーロッパ演奏旅行 コンサート(音楽奉仕)の会場と予定曲目

フライブルク(2009年8月9日)
大聖堂での日曜ミサに音楽奉仕
J.S.バッハ作曲のミサ曲より
・Kyrie, Gloria ... 《ミサ曲短調》BWV235
・Sanctus ... 《ミサ曲短調》BWV232より
・Agnus Dei ... 会衆歌(グレゴリオ聖歌)より
(カペルマイスターと打ち合わせ中)
フライブルクバッハ合唱団との懇親と協演(予定)
・モテット第1番 Singet dem Herrn BWV225

ストラスブール(8月10日)
改革教会にてコンサート(交渉中)
・<特別演奏会プログラム>

シュトゥットガルト(8月12,13日)
パウロ教会にてコンサート(12日)
・<特別演奏会プログラム>
パウロ教会聖歌隊との懇親と協演
・モテット第1番 Singet dem Herrn BWV225
ムッターハウスにてコンサート(13日)
・<特別演奏会プログラム>

現地の方々との打ち合わせの結果、来夏の各地での公演(音楽奉仕)は、おおよそ上記のプログラムで準備されることになりました。

フライブルク大聖堂では、カトリックのミサの典礼にしたがったの選曲。モテット第1番は、現地の合唱団のメンバー方との交歓(mitsingen 共に歌うこと)を目的として選曲。

上掲表中の<特別演奏会プログラム>は、本年夏の特別演奏会(世田谷中央教会、7.21)と同じプログラムです(ソプラノ・ソロ、合唱、フルート、オルガン伴奏による)

- ・カンタータ《み神よ わが死はいづ》BWV8
- ・カンタータ《深みより 主よなれを呼ぶ》BWV131
- ・カンタータ《グローリア 高き天なる神に》BWV191
- ・宗教歌曲 BWV446, 479, 507

演奏テキストは、ドイツ語原詞が主体で、ミサ曲とBWV191はラテン語(原詞)、BWV131のみ日本語訳詞です。



リリング氏(左)に来年の予定曲を紹介し、演奏楽譜を贈呈する筆者

をあげてバッハ・アカデミーが催され、私たちも第1回演奏旅行(1983年)では、ヘルムート・リリング氏の招待で、アカデミーの正式プログラムのなかで、モテット2曲を歌わせていただいたのでした。今では、シュトゥットガルト・ヨーロッパ音楽祭に発展して、今年も8月23日から9月7日まで開催中でした。そのただなかでお忙しいリリング先生と、ゲネプロの休憩時間に、私たちとお会いいただけるよう南先生が予約をしてくださり、私たちは密度の濃い再会を果たすことができました。(写真:前頁)

来年私たちがパウロ教会の招きでここを訪れるとき、リリング先生のご予定はどうなっているのか、あとで詳しく調べてみましょうとのことで、むかしリリング氏とともに、例の東京・経堂の「カフェハウス・バッハ」に2回もあらわれて親しい交歓をしたゲヒンガーカントライの面々との再会も、おりしもヴァカンス中のことで、あるいは実現できないかもしれません。ひょっとして何かの催しに出会えるかどうか、とにかく、来年8月12,13日に、ここで2回のコンサートを開くことをお知らせしてきました。



パウロ教会役員の方々。中央右は南吉衛先生

パウロ教会には立派な聖歌隊があり、年間をつうじて活発な演奏活動をしているのです。その役員、聖歌隊の方々と牧師夫妻、南先生、私たちの計7人が夕食をともにしながら、来年のことを語りあいました。みなさん明るく積極的で、ご協力の具体案がたちどころに決まり、コンサート後のパーティで、モテット1番 Singet dem Herrn を両方の合唱団で mitsingen することも、大きな期待のうちに提案されました。なんども歌っている曲だけど、また早めに練習をはじめておきましょう、とはりきったご返事でした。

シュトゥットガルトのことは、南先生の拠点だけあって、このように細部にいたるまで、下見の段階でしっかり見通せることになったのでした。

/// 合唱団の芽生えた地、ストラズブル ///

1983年に第1回演奏旅行がきまったとき、それは東ドイツへの国賓として、日本DDR(ドイツ民主人民共和国)文化協会の支援のもとに、公的に招かれたものだったにもかかわらず、私は西ドイツのシュトゥットガルトをへて、はるばるフランスのストラズブルまで、足を伸ばすことを考えないではいられませんでした。留学から帰ってから

第5回ヨーロッパ演奏旅行の旅程概略(2009年)

8月7日(金)	成田発 - フランクフルト着(1泊)
8-9日	フライブルク(2泊)
10日	ストラズブル(1泊)
11-13日	シュトゥットガルト(3泊)
14日	ローテンブルク - ハイデルベルク(1泊)
15日	フランクフルト発(機中泊)
16日(日)	成田着



トーマス・シュティフト(筆者の留学時代の学生寮)の中庭。愛されていた菩提樹の巨木が老齢でたおれ、いまは若木が生育中。

も、何回かヨーロッパツアーに参加した私でしたが、なかなかストラズブルまで再訪する機会を得られなかったからです。その後、祈りの共同体・テゼ(リヨン、ジュネーヴに近い)にも縁故ができたので、この第1回はテゼにまでもゆくという、途方もない大旅行になったのですが、若かったそのころの私たちは、勇んでこの大冒険にとりくみ、みごとに全員で果たしてきました。

このおり、ストラズブルの古楽の教会では、留学時代からすでに20余年たっていたのですが、演奏前後、顔なじみの方々がつぎつぎと挨拶にいらしてくださり、「こんどはいつ来られますか、待ってますよ」と送られたのでした。あまりにも短かく、夢のようなできごとでした。

南先生からシュトゥットガルトにご招待のはなしを伺ったとき、その最初から、私は、いよいよストラズブルに寄れる、と心ときめきました。もっと早くからストラズブルに、コンサート開催の依頼を始めるべきでしたが、シュトゥットガルトからの確定的な呼びかけが、意外とおそく、6月半ばまで待ったので、それから私は手紙を書くことになったのです。

じつは1983年のときは、まだ健在だったストラズブルの友人たちが、すべて事をはこんでくださり、私たちは当日現れればいようになっていたのですが、何の心配もなかったのですが、今回、交渉を始めるにあたって、私は、はたと感しました。第1回のコンサートからしても25年の時が流れ、留学を終えたのは半世紀も前のことで、もう当時



筆者留学時代の合唱仲間ペーテル夫人と、亡夫は神学者で学生寮の館長だった

の牧師先生も、また友人たちも連絡が絶えてしまっていました。それでも私は、改革教会(写真)(ここはルター派ではなくカルヴァン派なのですが、おもしろいことに、当時ストラズブルでも毎月1回欠かさず、礼拝内でバッハのカンタータを演奏するのは、この教会だけだったのです)の現在の牧師あてに手紙を書き、8月22日と26日の2回、お訪ねするので、もしご在宅であればお会いいただきたい、とお願いしました。あいにく、ちょうどヴァカンスにかかり、結局はお会いできませんでしたので、帰国してからすぐにまた書面での交渉を再開したところです。

その間に、私が住んでいた、かつてアルベール・シュヴァイツェルも館長をしたことのある学生寮、トーマス・シュティフト(写真:前頁右)にまず寄り、受付のシュリヒターさんに事情をはなすと、彼女は親身になってあちこち電話をかけまくってくださり、おかげで2人の方にお会いすることができました。そのおひとり、元館長未亡人のアンネリーゼ・ペーテル夫人(写真:上)は、かつて改革教会の合唱団でいっしょにアルトを歌ったお仲間でしたが、90歳をこえて、6人の男児からいまは60人の親族となって、フランス中に住まわれ、つい前日にその軒からヴァカンスを終えて帰宅されたところでした。かくも生命力のつよい夫人は、つぎからつぎへと共通の知人の消息を思い出されましたが、残念なことに、ストラズブルに残っておられる方は数えるほどでした。

そんなわけで、ストラズブルは、8月10日に、フライブルクからシュトゥットガルトに移動する中間点にありますので、ぜひコンサートを実現させたいと期待しています。もし成立しない場合でも、この合唱団の芽生えの地には、一泊して、ゴシック建築の精粹である大聖堂(カテドラル)(写真)などもしっかり見ていただきたいと思っています。

/// フライブルクでは日曜ミサの音楽奉仕 ///

今回の旅行のプログラム中、もっとも異色なのは、フライブルク大聖堂(ドーム。南ドイツではミュンスターと呼ぶ)で、日曜のミサの典礼のなかで、私たちに合唱の客演を仰せつかったことです。

フライブルクと松山とが姉妹都市で、橋本眞行さん(当合唱団副指揮者)の主宰される松山バッハ合唱団が、フライブルクバッハ合唱団と早くから往来し、昨2007年には松

山で、合同で《マタイ受難曲》を公演なさったこと、そこに東京からも参加させていただいたことは、みなさんも覚えていらっしゃるでしょう。その前にも、2001年に《口短調ミサ曲》を松山で合同演奏され、私も指揮者のポイアーレ先生に初めてお目にかかりました。そのときからすでに私は、フライブルクは、私が留学していたストラズブルに近いので、なんども訪ねたことなどを話し、こんどドイツに行く機会があれば、フライブルクにもぜひ表敬訪問したいと打ち明けていたのでした。

私が、バッハのカンタータ全曲演奏を実現させる合唱団をつくりたいと思いついたのは、芸大在学の間からで、その実体を見たいという希望をもって、シュヴァイツェルがカンタータ演奏を再興させたストラズブルに留学し、月1回、オリジナルな形態で礼拝中に演奏するバッハのカンタータを経験しながら、その時期にちょうど研修に来られていたフライブルクの服部幸三先生を、たびたびお訪ねしたのです。シュヴァルツヴァルトの麓(写真)を歩きながら、あれこれと先生に夢を聞いていただいたことを、つい先日のことのように鮮やかに思い出します。

私が何度かフライブルク訪問の意志をお伝えした結果、ポイアーレ先生は、シーズンオフの8月にという私たちのむずかしい条件を、何とか、と考えてくださったのでしよう。今年の7月になって「大聖堂でミサの音楽を担当するように、カペルマイスターの同意を得ました」と、望外なお話を伝えてこられたのです。そして、私が下見旅行にたつ前日には、カペルマイスターの秘書をしておられる日本人のシューマツハ智子様から、詳細を指示するメールがとどきました。



大聖堂(ミュンスター)。有名な正面の塔(写真の左手)は補修中だった

またヴァカンス中のポイアーレ先生に代わって、代表のバス団員ヴェルナー・パウアー氏(写真)が、8月24日に、フライブルクで私に会ってくださるよう、はからってくださいました。24日朝、ミサに参列して、客演のポーランドの合唱団(写真)の演奏を、実際に見聞し、午後にはパウアー氏といろいろ話し合い、すっかり様子が飲み込めました。あとは、この、過去4回にもなかった新しい課題(カトリックのミサへの奉仕)を、善意のみなさまのご期待に報いられるよう、誠意をもって整えてゆくばかりです。

フライブルクバッハ合唱団のバス団員ヨアヒム・ボーマ

ン氏(写真)も、松山で昨年6月にお会いしたときから、下見旅行にはコルマール郊外のご実家で3泊過ごしてくれるようにと、お誘いいただき、お母様と一緒に、いたれりつくせりのおもてなしをいただきました。ライン川をはさんだアルザスのヴォージュ地帯と、ドイツのシュヴァルツヴァルトの両側をドライブしていただき、おかげで私のセンチメンタルジャーニーは、数十年のへだたりを一飛びで越えることができました。

来年8月の、50人の旅が、この世のものとも思えないほど美しく意味深い10日間になることは、もう確実に近くなりつつあります。音楽を完成させることは言うにおよばず、さらに現実的な隘路、旅行費用の捻出という大きな大きな壁も、求めよ、さらば与えられん の強い信念をもって、乗り越えてゆきたいと願います。Goサインは、もうこれほどはっきりしたのでありますから！



コルマールの運河。アルザス地方の典型的な家屋が見える。来年もフライブルク-ストラスブールの移動の途中に寄り、グリュネヴァルトの祭壇画で名高いウンターリンデン美術館を見学する。



フライブルクの町並み。シュワーベン門の近くの高台から望見。緑濃いシュヴァルツヴァルトにつつまれている



シュトゥットガルトのパウロ教会。戦災で破壊されつくし、近代的な装いで再建された。パウル・クレーの図柄のステンドグラスが印象的

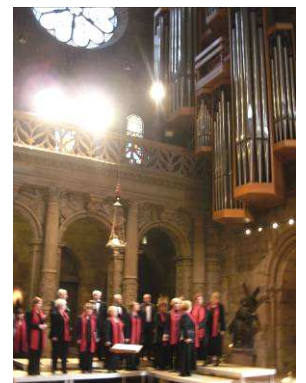


フライブルクバッハ合唱団のパウアー氏と打ち合わせ。一緒にうたう機会を設けましょう、とのこと



ストラスブールは、シュヴァイツァー博士がバッハのカンタータを現代に甦らせた町。学生寮(トーマス・シュティフト)に隣接したトーマス教会にはシュヴァイツァーが愛用したオルガンがあった。両脇にはバッハとシュヴァイツァーの写真パネル

フライブルクの大聖堂。この日の客演はポーランドのChor Cantus Gdynia。澄んだ響きの素晴らしいコーラスだった



ストラスブールの改革教会。筆者の留学時代の教会。ここでバッハのカンタータ演奏にたずさわった。1983年に第1回訪問演奏



ストラスブールの大聖堂。圧倒されるばかりの量感である



フライブルクバッハ合唱団のヨアヒムは、かわいい姪御さんのピアノレッスン。来年のツアーにも同行したいと語っていた。コルマール郊外のご実家で



ハイデルベルクの古城を Neckar 川の彼方に望む。来年はコンサートの大役をすべて終えて、ローテンブルク経由で観光する最後の宿泊地



はじめての野尻湖合宿

岡田 靖子

8月1日、2泊3日の合宿に初参加の私は、久しぶりの遠足気分で、わくわくしながら黒姫駅に降り立つとひんやりした空気、心地よい風によっておそばのおいしそうな香りが、昼食はすでに済ませていましたが時間が許せば香りにつられてたべていたでしょう。幸運にも最終日解散後、おそばを味わうことができました。戸隠神社へ参拝して12名で、菅間さんご紹介のお店へ。康さんの「私は大盛！」の声に私も大盛そばを注文しました。蕎麦湯もとってもおいしかったです。

現地での練習は、大村先生、橋本先生の集中的なご指導で回を重ねるごとに上達を感じられ、少しずつでもやればできる喜びをパートの人と分かち合いながらも、いつまでも弱点を克服できないままの自分にステージでは冷や汗が噴出していました。打ち上げ後、松尾さんのご好意で素朴な木造教会での演奏会がビデオで再現された時には、その場を逃げ出したかったです。

滞在中、お蔭様で天候に恵まれ、まるで絵に描いたような湖水と山々を、毎日目の当たりにしながらのすべてのことが本当に楽しく、有意義なものでした。教会での演奏会はもちろん、練習の合間のミニコンサートや室田ファミリーとの花火、暗がりの湖畔での夕涼み、朝食前の散歩、ジャムのおいしかったこと、朝日を浴びながらボートに乗せていただいたこと等々書きつくせません。美しい景色、さわやかな空気のなかで感動的なシーンはたえまなく、演奏会後すぐ帰宅なさった方もあれば、当日日帰りで駆けつけてくださったかたなど、万障繰り合わせて大村先生の下に集われた皆様の、情熱とご親切が身にしみて感じられた初合宿でした。まだお顔とお名前が一致しない私ですが、ご参加の皆様だけはようやくわかってきました。

両先生をはじめ、役員の皆様、団員のかたがたに心から御礼申し上げます。ありがとうございました。

(団員：ソプラノ)

早朝テニスに出かける若者？たち



朝食に来てない誰？

リハーサル風景



神山教会は骨董的価値が出てきた

野尻湖演奏会

加藤 剛男

このたびの野尻湖演奏会は、いつもの年とちがって重要な意味をもっていました。第1に、来年2009年の第5回ヨーロッパ演奏旅行に向け、ほぼ同じプログラムで演奏したこと。第2に、従来の午後7時の開演から、午後4時に変更したこと。この2点でした。

来年のヨーロッパ演奏へ向けての準備演奏会は、まず第1回目を、去る7月21日に世田谷中央教会で、ソプラノ光野孝子、フルート山田恵美子、ピアノ金澤亜希子、指揮大村恵美子/橋本眞行と、出演者はヨーロッパ演奏と同じメンバーで行い、第2回目は野尻湖神山教会で、上記ソリスト(ソプラノおよびフルート)お二人を除いたメンバーで行い、ヨーロッパでの上演1年前に、演奏に対し一定の自信をつけるという目標を持ち、その後1年かけて練習し、完成した形でヨーロッパ演奏の本番に臨むというものでした。

8月2日(土)の午後4時開演については、43年前より続けてきた午後7時開演を変更するもので、事前の団員相談会でもさまざまな意見がありましたが、野尻湖国際村では、別荘地での夜の団楽のひとときを各家庭で過ごしておられる方が多いのではないかと、開演時間を早めれば、野尻湖周辺に滞在中の一般の愛好家の来場が可能になるのではないかと、団員のスケジュールも、演奏会後に急ぐ方は、その日のうちに自宅に帰ることができるため、演奏会出演者も増えるだろう、という考えで変更されました。当日、果たしてお客様が聴きにきていただけるか、多少心配もしましたが、昨年よりも出足もよく、新しい顔ぶれも見え、またお子さんとご一緒のご家族も増えて、2階席で聴かれる方々もおられました。

プログラムは、バッハ作曲のカンタータ3曲、およびフランツ・リスト作曲のピアノ曲2曲で、カンタータは作曲年代も、新進気鋭のバッハ22歳での第131番、もっとも気

力充実した年代 39 歳の第 8 番、円熟した年代 58 歳の第 191 番と、生涯にわたっての作品を味わうというものでした。それぞれが珠玉のものばかり、また演奏会でしばしば取りあげられるものばかりという、ヨーロッパ演奏としては実に相応しい作品が選ばれたのでした。

演奏の最初は、カンタータ第 8 番《み神よ わが死はいつ》。フルートがみごとな活躍をする名曲です。第 1 曲の 16 分音符の連打は、夏の終りのヒグラシ蝉のカナカナカナと鳴く声を思わせ、“短いしばらくの間を地上にあって暮らし、土に帰る”人の生きる姿を描くように思えました。林に囲まれた野尻湖畔で歌うのは、なんと曲のイメージを彷彿とさせるものかと思わせられました。世田谷中央教会で、同じ曲を山田恵美子さんのフルートで演奏した音が頭の中に鮮明に残り、その美しい音色と湖畔の自然とが融合し、なんともいえない豊かな思いをあたえられました。

つづいては、今回の演奏会全体のピアノ伴奏をしてくださった金澤亜希子さんによるピアノ独奏で、まずは《アヴェ・マリア》。リストは何曲か《アヴェ・マリア》を作曲していますが、今回の曲は「ローマの鐘」ともよばれているもので、低音がオルガンのように鳴り響く、深く心にしみわたるもので、湖畔の夕方の静けさとあいまって、心に安堵感と平安をあたえるものでした。第 2 曲目は《超絶技巧練習曲第 2 番》。テクニク的に大変難度の高いもので、「超絶」の意味には、技術だけでなく精神的な要素が含まれているようです。金澤さんの爆発的なエネルギーとスケールの大きさを感じた演奏でした。

休憩後、カンタータ第 131 番《深みより 主よわれはなれを呼ぶ》で、暗い淵のただ中にある重苦しさにはじまり、第 3 曲の合唱“私は主を待ち望む。私の魂は待ち望む”で新たな展開となり、コラール“主の慈しみ、贖いに望みをいだけ”で、至福の世界へ入る。動きのある変化に富んだ作品を、心をこめて歌いました。

最終曲は、カンタータ第 191 番《グロリヤ 高き天なる神に》で、バッハのカンタータのなかでも唯一のラテン語作品で、《ミサ曲口短調》のハイライト稿の趣きをなすカンタータです。大村恵美子先生の「死んだ気持ちになって、最後まで歌いきるように」とのご指導が、歌う団員の気力にもなり、バッハの作品の集大成ともいわれる《ミサ曲口短調》の原曲ともなった大規模なカンタータを、歌い切ることができました。

初日の晩に行なわれた、団員による内輪のミニコンサートは、例年にまさってレベルの高いものでした。アルトパートによるカンタータ第 75 番のアリア。菅間五郎さんのアルゼンチンタンゴ。室田悟・千晶さんご夫妻による グラティアス。島津欣矢さんのモーツァルトの 2 つのアリア。川合満里子さん、菅原昌子さん、朴木真貴子さん(元団員、大阪から参加) 橋本眞行さんらによる《野尻湖版カルメン 続編》などなど、詳細は残念ながら紙面の都合で省かせていただきます。今年は、1 日少ない 2 泊 3 日の野尻湖合宿でしたが、ほとんどの団員が初日から参加し、実に充実した野尻湖合宿でした。幹事をしていただいた、アルトの方々の心ゆくまでのお世話、ありがとうございました。

(団員：バス)

柳元 宏史

連載：全部おすすめ 50 曲選!! <その 16>

カンタータ第 84 番《われ足れり わが幸に》

日常生活のなかで、予測しないことが起こると、それが一見、負に見えることであればなおさら、うろたえ、焦り、落胆し、さまざまな好ましくない感情が心に吹き荒れる。苦悩をとまなうことであれば、これまた肩を落としてしまふ。思いがけない病や身内の不幸など、とくにそうであろう。しかし同時に、不幸のさきに希望の見えてきたとき、これまでの生活で気にも留めなかった日常のちょっとしたことがらで心が動かされ、幸せを噛みしめることができるようになるのではないか。

バッハは、妻(最初の妻マリーア・バルバラに死に別れたのち、アンナ・マグダレーナと再婚している)や幼子を失う経験に何度も見舞われ、どれだけ悲しみに暮れたことだろう。仕方のないことであっても、家族を失うことはつらい。そして残された家族をいとおしく思う。

ソプラノの独唱カンタータ、第 84 番《われ足れり わが幸に》には、バッハ一家のライブツィヒにおける、おだやかで、つつましくも幸せな生活を感じることができる。神から受ける恵みがどんなに小さくても、それを全身で受けとめ、また ゆたかに 溢れずとも 全身でその たまものを受けとめ、感謝している。あたかもこの曲は、バッハ一家の感謝の祈りのようである。その祈りをみごとに 1 曲目から 4 曲目までソプラノの光野孝子氏が、こんこんと心から溢れでる感謝の泉のように流麗に歌いつづけ、最後のコラールでは、待ち構えていたように、日本の讃美歌でも馴染みの旋律(「愛する神にのみ 依り頼むものは」讃美歌 304 番、「21」454 番、歌詞は別コラール)を、メリハリのあるすばらしい合唱で締めくくっている。必聴である。

個人的に気に入っているのは、第 3 曲のアリアである。

喜びて 小さき 糧を受け

となりびとにも 分かつん 心より

やすき 心 楽しき 感謝の 心は

ほめ歌い み恵みを 増し

悩みを やわらぐ

どんなに 小さき糧 であっても、それを心から喜んで となりびと とも分かち合う。びっくり驚くような幸せなんかじゃなく、ごく日常の 幸 に われ足れり と感謝する。そうだ、本当の幸せって、身のまわりにいくらでも与えられているじゃないか。それを受けとめ、分かち合い、感謝する。なんとすばらしいことだろう。わたしも最近さまざまな出来事とおして、なにか特別のことばかりでなく、身のまわりに転がっている小さな幸せに気づけるようになってきた気がする。

(やなぎもと・ひろし, 東京神学大学大学院在学中, 団員：バス)

CD バッハ・カンタータ 50 曲選 [第 12 巻] に収録。S 光野孝子, 大村恵美子指揮・東京バッハ合唱団 / 東京カンタータ室内管弦楽団, オルガン草間美也子。1999 年録音 (第 85 回定期演奏会・石橋メモリアルホール)

楽譜：東京バッハ合唱団 / ブライトコプフ「50 曲選」No.28